

Pre-News Letter

No. 2

17年 8月 8日(月) 発信

Sato Project

Sato Project

～社会的・生態的そして地球環境問題としての遺伝資源の喪失～

「里」プロジェクト

お問い合わせ 総合地球環境学研究所佐藤研究室 (大島)

上京区丸太町通河原町西入高島町 335 mihosma@chikyu.ac.jp

〒602-0878 Tel:075-229-6209・6208 Fax:075-229-6200

「日本人と自然のいとなみ」篠田謙一(国立科学博物館)



(鳥海山と水田の風景：篠田謙一撮影)

私の勤務する国立科学博物館では、昨年11月の新館オープンと同時に、本館を全面リニューアルする作業に入りました。新館は地球生命史を中心とした展示を行っており、リニューアルする本館は日本を対象とした展示館となります。私が関係する2階北側フロアは「日本人と自然」という統一テーマのもと、基本設計の段階では人類研究部が「日本人の形成」を、動物・植物研究部が「日本人の育ててきた自然」というタイトルで展示を作成することになっていました。しかしこの基本設計に博物館上層部から待ったがかかりました。実は2階の南側フロアで日本の産業技術に関する展示が展開されることになっており、そこの連続性を持たせるようにという注文が

ついたので。つまり、私たちのフロアの最後に自然と科学技術に関係する展示を挿入せよというのです。3つの研究部でババの引き合いになりましたが、結局力関係で劣る人類研究部がそれを担当することになりました。自然と科学技術を結びつけるのですから、農林水産業に関わる展示を持ち込むしかありません。いろいろ考えて、テーマは「日本人と自然のいとなみ」と決めましたが、悲しいかな人骨とDNAしかわからない我々には途方に暮れる話でした。

そのとき、ふと思い出したのが佐藤プロジェクトでした。よく考えればこのプロジェクト、そのまま展示に持ち込めそうな話がいっぱいだし、何しろ農学の専門家集団で構成されているのですから、誰に相談してもうまくいきそうな感じです。そこで「日本人なら稲作だ」と中心テーマは勝手に決めて、後のシナリオは佐藤さんにすがることにしました。展示する米の品種の選定は門脇さんをお願いして、実際に作付けしてもらうことにしました。ホントに良いプロジェクトに入っていたものだ、と自分の強運に感謝しました。実は動物研究部がこの展示の前にぶつけてくるのは、科博が誇る3大スター「忠犬ハチ公剥製標本」と「南極観測犬ジロ剥製」そして絶滅したトキの標本なのです。これに負けないよう圧倒的に美しい稲作の四季の映像を撮影することにしました。これも佐藤プロつながりで紀伊国屋さんをお願いしています。というわけで佐藤プロ番外編科博展示は、早ければ来年度公開の予定です。ご期待ください。

Topics

国際植物学会議（ウィーン）便り

福永健二 国際日本文化研究センター

7月17日より23日まで、6年に1回の植物学の学会、第17回国際植物学会議(IBC)に出席させていただきました。分類学、生態学、進化学、民族植物学、考古植物、分子生物学などなどの6年に1回の植物学全体の学会ということで、全体で228のシンポジウムと2730のポスター発表があり、世界中から参加者多数でした。個人的には、シンポジウム「倍数性進化」のフランスレンヌ第1大学グループの口頭発表で共著にいただき、日本での「モチ性のアワの起源」の仕事をポスター発表をさせていただきました。また、今回の学会で仏米の研究者と再会し、旧交を温めることができました。

シンポジウムでは倍数性進化や古代DNA、アイスマンの古民族植物学、進化ゲノミクスなどに参加しましたが、最新の話題が多く非常に刺激的でした。次回は2011年にオーストラリアのメルボルンで開催されるとのことでコアラの人形をお土産にいただきました。次のこの機会にプロジェクトの成果を発表できるようにしたいものです。



今回は人類班の篠田謙一先生の科博にて企画されている新館オープンに伴う展示についての報告でした。次回はイネ班の先生からの報告を予定しております（宜しくお願ひ致します）。また、Topicsとして、今回はコアメンバーの福永健二さん(植物遺伝学)にもウィーン便りを書いていただきました。これから海外出張に行かれるメンバーの皆様！是非ホットな情報をお寄せください。